

INDAS South Asia Working Paper No.26

March 2019

なぜインドは理解されないのか

——「流動性」と「多様性」の視点から——

湊 一樹 \*

**Understanding India from the Perspective of Mobility and Diversity**

Kazuki MINATO \*

人間文化研究機構プロジェクト地域研究推進事業「南アジア地域研究」

NIHU Project Integrated Area Studies on South Asia

---

\* アジア経済研究所地域研究センター

E-mail: kazuki\_minato@ide.go.jp





















































端なイメージを体現するような現実がどのように共存し、それがなぜ可能なのかを解き明かすことが何よりも大切なのである。

では、そのためには具体的に何が必要なのだろうか。最後に、流動性と多様性という 2 つのキーワードを踏まえたうえで、どのような視点に立ってインドという複雑極まりない国の在り方について考えるべきなのかを述べることにしよう。

第 1 に、歴史的な経緯との関連から、現在起きていることを理解するという点である。私たちが目にしている急速な経済発展やそれに伴う「近代化」の波によって、これまでの歴史的な積み重ねがすべて洗い流されてしまう訳ではない。それとは正反対に、「近代化」が歴史的な要因に新たな意味や役割を与え、それが現在の社会に重大な影響を及ぼすことさえある。実際、特定のカースト集団を支持基盤とする政党の台頭や子供の性比の低下などのように、「近代化」によって「前近代的」な側面が強められるという奇妙な現象が様々な領域で起きている。さらに、多様性が歴史的背景とどのように関係しているかという点にも注意しなければいけない。なぜなら、歴史的背景という初期条件が異なれば、経済発展や「近代化」による影響もそれに応じて異なったものになる可能性があるからである。

第 2 に、「木を見て森も見る」ように心掛けるという点である。巷に溢れるインド関連本のなかには、大雑把なデータや印象論だけに基づいて議論を行っているものが少なくなく、背後に隠れている大きな「ばらつき」をバツサリと切り捨ててしまいがちである。それとは対照的に、学術研究の場合、限られた対象（例えば、ある村落や社会集団）に焦点を絞って詳細な研究が行われているものの、そのごく限られた研究対象がインド全体のなかでどのような位置づけにあり、どのような意味を持っているのかという点は往々にして説明されない。全体にばかり目を奪われたり、部分にのみ埋没したりするような両極端を避けるために、「木」と「森」の関係に注意深く目配りしながら、インドの流動性と多様性とその意味を考えていく必要がある。